

国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本語のイントネーションとアクセントの関係の多様性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): intonation, accent, copulative relation, cumulative relation, conflictive relation 作成者: 定延, 利之, SADANOBU, Toshiyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002135

日本語のイントネーションとアクセントの関係の多様性

定延 利之

(神戸大学)

キーワード

イントネーション, アクセント, 並列的關係, 足し算的關係, 競合的關係

要旨

日本語(共通語)のイントネーションとアクセントは、並列的(copulative)あるいは足し算的(cumulative)な関係にあり、共存すると考えられることが多い。本稿は、非実験室的な発話状況に積極的に目を向けることによって、日本語のイントネーションとアクセントがこれまで考えられているよりも多様な関係に立ち得るということを、3点にわたって示す。第1点、さまざまなイントネーションとアクセントの間には、競合的(conflictive)な関係が認められる。その場合、話し手のきもちに応じて、イントネーションがアクセントを消したり、逆にアクセントがイントネーションを消したりする。第2点、イントネーションとアクセントとの共存は、時には、両者の力の拮抗に基づいた表面的なもので、より根底に両者の競合が見られることもある。若い世代の新しい言い方も、その一端を反映する。第3点、イントネーションはアクセントに対して上記3種の関係の他に、寄生的(parasitic)な関係に立つこともある。

1. はじめに

言語研究において何をどこまで考察すべきかという問題は、研究の目的に大きく左右される。考察対象が狭く限定されているからといって、それだけで直ちに或る研究を非難することはできない—以上の考えは、筆者が以前から述べてきたものである(定延 1998, 2000)。

また、特に「ことばの意味と形式の対応をできるだけ広く深くさぐる」という目的を掲げる言語研究の場合、さまざまな研究方法があり得る。完全無欠な研究方法というものがおそらく存在せず、どんな方法にもそれなりの利点と限界がある以上、或る研究方法(たとえば作例と内省に頼った伝統的な研究方法)を不当と決めつけるよりも、さまざまな方法の利点と限界をよく意識し、適宜、方法を組み合わせるなど複合的な観点から研究を進めていく方が生産的だろう。これも、筆者が述べてきたことである(定延 2002)。これらの考えはいまでも変わっていない。

その上での話だが、「ことばの意味と形式の対応をできるだけ広く深くさぐる」ためのこれまでの言語研究が、現実の発話状況をあまりにも軽視しすぎている、という批判には、たしかに耳を傾けなければならない部分があるのではないか。たとえば、デキゴト表現をめぐるホッパーのクロフト批判は(Hopper 1995)、作例に基づく研究方法に対して厳しすぎるという点で疑問は残るものの、きめ細かな言語観察が現実の発話状況を離れてはあり得ないことの一つの例証にはなっているだろう。

デキゴト表現の場合と同じことが、イントネーションとアクセントの関係についても言えるかもしれない。本稿は、非実験室的な発話状況に積極的に目を向けることによって、現代日本語の共通語（以下「日本語」）のイントネーションとアクセントの関係についての観察を行う。その中で、日本語のイントネーションとアクセントがこれまで考えられているよりも多様な関係に立ち得るということを示すものである。

なお、「アクセント」という用語については、「語中での高低の組み合わせ」「語中でのアクセント核の有無および位置」という2つの異なる定義があり、どちらをとるかで現象の位置づけや説明法が違ってくる場合がある。本稿ではアクセントを「語中での高低の組み合わせ」と定義しておくが、これは説明の便宜のためにほかならないことを断っておきたい。アクセントを「語中でのアクセント核の有無および位置」と定義し、語頭の「低」から「高」への上昇部分はアクセントではなくイントネーション（句音調）だとする考えを、本稿は否定するものではない。以下で適宜示すように、「日本語のイントネーションとアクセントがこれまで考えられているよりも多様な関係に立ち得る」という本稿の中心的な主張は、いずれのアクセント定義を採用しても成り立つ。

2. 先行研究の紹介

これまでのところ、日本語のイントネーションとアクセントは、並列的 (copulative) もしくは足し算的 (cumulative) という、いわば共存的な関係にあるとされることが多い。まず、並列的な関係から、例を挙げて紹介しておく。

たとえば単語「雨」のアクセントは、「あ」が高く、「め」が低い「あめ」である（ここでは音調の高い、低いを、イントネーションとアクセントの区別もせず、ごくごく素朴に、上付き線（高い音）と下付き線（低い音）で表すことにする）。このアクセントは、「雨？」と上昇調イントネーションで問いかける場合にも尊重される。つまりその場合、「あ」が高く「め」が低いという単語「雨」のアクセントどおりに「あめ」が発せられた後で、「め」の母音「え」が伸ばされて上昇調イントネーションで発せられる。イメージを図示すると図1のようになる。

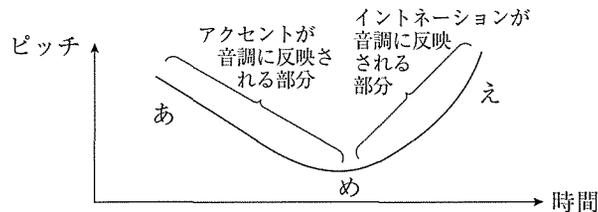


図1 「雨？」における、イントネーションとアクセントの並列的(copulative)な関係のイメージ

イントネーションとアクセントの並列的な関係とは、このように、「仲良く並んで音調に反映される」というイントネーションとアクセントの関係を指す。

次に、イントネーションとアクセントの足し算的な関係を紹介しよう。たとえば、単語「飴」

のアクセント（「あ」が低、「め」が高）は、「飴だ」の意味で「飴。」と言う場合にも尊重されるし（「あめ。」）、「飴か？」の意味で「飴？」と言う場合にも尊重される（「あめ？」）。ところで、「め」の上昇具合を比べると、「飴。」の場合よりも「飴？」の場合の方が上昇具合が大きい。つまり「飴？」の「め」の高さは、もともと単語の「あめ」の「め」が高アクセントである上に、上昇調イントネーションの高さが足し算され、上乘せられてきている。イメージを図示すると、図2のようになる。

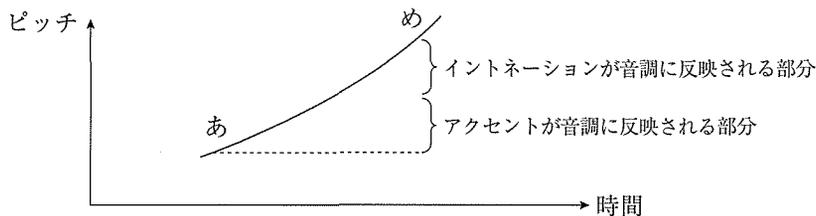


図2 「飴？」における、イントネーションとアクセントの足し算的(cumulative)な関係のイメージ

イントネーションとアクセントの足し算的な関係とは、このように、「足し算されて音調に反映される」というイントネーションとアクセントの関係を指す。

いま説明した並列的・足し算的關係では、イントネーションとアクセントは共存している。イントネーションとアクセントが戦い、敗れた方が発話音調への反映を阻害されるという競合的(conflictive)な関係は、多くの先行研究では認められていない。

たとえば天沼・大坪・水谷(1978:p.154)では「日本語では、イントネーションがアクセントの型を崩すことはないということがいえる」とされている。さらに、このことは英語(疑問文“Are you a Japanese?”の“Japanese”は、肯定文中の場合と違って単語中で下がらず、上昇したままである)と対比された上で、「日本語の一つの特徴」と位置づけられている。日本語教育でも事情はほぼ同じで、たとえば松崎・河野(1998:p.117)のように、「一般にイントネーションによってアクセントが崩れることはない」とされることがふつうである。

断っておくが、イントネーションとアクセントの競合的な関係を認める記述も、まったくないというわけではない。川上(1963:p.33,37)には「アクセント核が上昇調のために消える」「極力軽く、第二種の上昇調で言おうとすれば、アクセントの滝は消えざるを得ない」という記述がある。また秋永(1966:pp.58-59)にも、「奉読調」「暗記調」「子役のせりふ調」がアクセントの型を「無視」「破壊」という記述がある(但し、これらの調子がイントネーションかどうかは明言されていない)。森山(1989:pp.173-174)でも、イントネーションがアクセントの下降を無化するという現象が指摘されている(しかし、拍数やアクセント型の点で制約があるという観察のもとに、「一般論としてはイントネーションは、アクセントを保存した上で、文末に付加すると言えそうである」とされている)。アベは早くから競合的な関係を認めていたようで、本稿の「並列的(copulative)」「足し算的(cumulative)」「競合的(conflictive)」の英語名はAbe(1998:p.362)から採っている。また、或る単語に対するフォーカスがイントネーションによって表されると、それ

に続く語群のアクセントが弱められると郡(1997:pp.172-184)は述べている。これも、以上に挙げたものとは異なる形だが、やはり単語のアクセントが音調に反映されるのをイントネーションが阻害することを認める記述と見てよいだろう。このように、イントネーションとアクセントの競合的關係を部分的にせよ認める記述は、ないわけではないが、研究の全体からみると、決して多くはない。

だが、日本語の音声コミュニケーションの具体的な発話状況に目を向けると、イントネーションとアクセントの競合的關係は、いま挙げた文献で認められている以上に、活発に認められるということが明らかになってくる。以下ではこのことを、筆者が【ラーソラ】【高い平坦】【じりじり上昇】【上昇】と呼んでいる4つのイントネーションを使って示したい。

3. 【ラーソラ】

たとえば、「できた」のアクセントは「できた」(高低低)であり、「やめた」のアクセントは「やめた」(低高高)である。だが、現実の音声コミュニケーションでは、これらがまったく同じ調子で発音されることがある。この時、「できた」「やめた」のアクセントは、音調にはまったく反映されず、消し去られている。ここでは、その例として、筆者が仮に【ラーソラ】と呼んでいるイントネーションを紹介しよう。

【ラーソラ】というのは、ピアノでも縦笛でも何でもいいが、「ラーソラ」と弾いた(あるいは吹いた)場合に楽器から出てくるメロディに近いイントネーションを指している。「できた」も、「やめた」も、【ラーソラ】で発音すると、「でーきた」「やーめた」となる。「でー」「やー」の部分がラの音で、「き」「め」の部分がソの音、最後の「た」の部分がラの部分であって、両者の音調には違いがない。ここでは「できた」や「やめた」のアクセントは完全に無視されている。また、【ラーソラ】で発音されるものの中には、「かーえろ」のように、【ラーソラ】の枠にはめ込むために、本来の発音(「帰ろう」)の末尾(「ろう」)が切りつめられる(「ろ」に短縮される)ものもある。

【ラーソラ】は子供っぽいイントネーションだが、子供しか【ラーソラ】の発音をしないかというところではなく、いい年をした大人が或る場面でおどけてみせて、【ラーソラ】の発音をすることもある。「子供っぽい」とはあくまで発話キャラクター(定延 2005)の話であって、話し手の実年齢(社会的位相)の話ではない。

【ラーソラ】の意味は、「次の状況にさっさと気持ちを切り替える」といったあたりになるだろうか。話し手が【ラーソラ】のイントネーションで「でーきた」と発音しているのを聞けば、「それまで話し手がやっていた何らかの作業(たとえば宿題)は完成した」ということがわかるだけでなく、「話し手の心はすでにその作業にはなく、次にやること(たとえばテレビゲーム)に向いている」ということまでわかる。「やーめた」も同様に、それまでやっていた作業をやめてしまうことだけでなく、話し手の心がすでに他のことに向いているということをもうかがわせる。「かーえろ」も、話し手が帰宅することだけでなく、話し手の心がもはやそれまでの状況を離れているということまで察知させる。

「できた」「やめた」「かえろ」のように、ひとりご的な発音が【ラーソラ】でなされる場合とは別に、相手に対する返答が【ラーソラ】でなされることもある。だが、【ラーソラ】の意味についてはやはり「次の状況にさっさと気持ちを切り替える」という理解でよいだろう。たとえば、「〇〇ちゃんて、サソリ座なの？ 教えてー」という相手に対して、「かもね」「さあね」「やだね」「しらない」「おしえませーんよー」などとはぐらかし、シラを切り、小さな意地悪をするという場合には【ラーソラ】が現れる。4例目の「しらない」は、最後の「ない」が早口で発音され、最後のラの音の部分に押し込められる。5例目の「おしえませーんよー」も、「おしえませー」が早口で発音されて最初のラの音の部分になり、「ん」がソの音の部分、「よー」が最後のラの音の部分になる。【ラーソラ】でかもしだされる、〈私の心はもう、あなたとの会話にはない〉という態度が、意地悪を完成させている。

その他、意地悪と言えるかどうかは微妙だが、レストランで若い女性が恋人の皿からエビフライを勝手に取って、食べようとしながら「エビフライもーらい」あるいは「エビフライもーらい」と言うような場合がある。「エビフライ」の部分は「エビフライ」もしくは「エビフライ」であって、ほぼアクセント（「エビフライ」）どおりだが、「もーらい」の部分は【ラーソラ】で発音される。これは、〈私があなただの皿からエビフライをもらうというのは、済んだ話で、私の心はもう別のところに向いている。あなたの抗議は受け付けません〉という問答無用の通告を（もちろん恋人として、あくまで子供っぽく甘える形で）行うということだろうか。

「おしえませーんよー」は全体が【ラーソラ】に押し込められる一方で、いまの例の前半部「エビフライ」は、【ラーソラ】の枠に入らない。このように、【ラーソラ】が発言のどこにまで及ぶかという問題には、項という概念が関わっている。「おしえませーんよー」は項を含まないが、「エビフライもーらい」は動詞「もらい」（もらう）の項として「エビフライ」を含んでおり、この項までには【ラーソラ】は及ばない。また、「おしえませーんよーだ」を考えると、末尾の「だ」は非常に低い音で発せられ、【ラーソラ】の枠には入らない。同様に、「かえろっと」も、末尾の「と」は非常に低い音で発せられ、【ラーソラ】の枠に入らない。【ラーソラ】の枠に入らない文末の「だ」「と」は何なのかという問題は、文構造の問題でもある。【ラーソラ】の勢力圏は文法を抜きには論じられない。

4. 【高い平坦】

いま取り上げた【ラーソラ】は、音声の高さを単に「高い」あるいは「低い」と指定するのではなく、「高い音と低い音は、ラの音とソの音ほど違う」という形で、音声の高さを具体的に指定している。さらに、音声の長さについても、「最初のラは、続くソや最後のラより長い」と具体的に指定している。これらの点で、【ラーソラ】は一般のイントネーションとは違っており、イントネーションというより、メロディと考える方が適切かもしれない。つまり、アクセントを消し去る「イントネーション」の例としては、【ラーソラ】は適当ではないと考えられるかもしれない。それでは、音声の高さも長さも具体的に指定しないイントネーションがアクセントと競合的な関係に立ち、アクセントをかき消すことはあるだろうか？ 筆者が【高い平坦】と仮称す

るイントネーションをとりあげて、この問題を検討してみたい。

ここで【高い平坦】と呼ぶのは、文字通り高く平坦に聞こえるものを指しており（但し、ごくわずかに上昇するものも含めている。以下ではこれも含めて「平坦」と言う）、特に音程や長さは問わない。したがって、【高い平坦】をイントネーションと呼んでも、【ラーソラ】についていま挙げたような、「メロディであって、イントネーションではないのではないか？」という疑いは生じないだろう。

たいていの場合（詳細は後述）、【高い平坦】は単語のアクセントを消し、文全体の音調を高く平坦にする。たとえば、暗い洞窟の奥に向かって、「おーいだれかいるかー」と叫ぶ場合である。「だれか」（高低低）や「いる」（低高）などのアクセントとは関わりなく、文「おーいだれかいるかー」全体の音調が高く平らになっている。

【高い平坦】の意味をとりだすことは難しいが、あえて言えば「私は叫んでいる」になる。つまり、日本語には、声の大きい小さいというレベルとは別に、スピーチアクトのレベルで「叫び」というタイプがあり、【高い平坦】はこれを表す。具体的な使用状況としては、【高い平坦】はおもに以下7つの状況で使われる（よりくわしい記述は定延 2004 を参照されたい）。

第1の状況は、いるのかわからない相手に対して呼びかける状況である。この状況は、「聞き手に向けた話しかけ」というふつうの発話の構図から外れるので、「叫び」になりやすい。上述した、暗い洞窟の奥に向かって「おーいだれかいるかー」と言う場合はこれにあたる。

第2の状況は、聞こえるのかわからないほど遠くにいる相手に対して呼びかける状況である。たとえば「そっちへ行ったらあぶないぞー」は、「そっちへ」「行ったら」「あぶない」のアクセントをそのまま活かして言えば、そう遠くないところにいる人間に対する発話かもしれないが、【高い平坦】で真っ平らに「そっちへ行ったらあぶないぞー」と言えば、ハイキングで、遠い向こうの崖付近にいる人間に「引き返せ」と叫ぶ、といった情景になる。

第3の状況は、不特定多数の相手に対して呼びかける状況である。誰か特定の個人に向けられた発話でないという事情は、やはり聞き手をばやけさせがちで、「叫び」を自然にする。たとえば、「はいダイコンやすいよー」「交通遺児募金にご協力おねがいしまーす」などと【高い平坦】で言えるのは¹、それが目の前を通り過ぎていく特定の個人に向けての発話ではなく、「ご通行中の皆さん」に対してのものだからである。そして、その発話を聞いた通行人が、いちいち「あの、ダイコンは間にあってますから」「いや、昨日もう募金しましたのでちょっと」などと返答せず、まるで聞こえなかったかのような顔をして、八百屋や募金の呼びかけ人を平気で無視して目の前を通り過ぎていけるのも、【高い平坦】の「はいダイコンやすいよー」や「交通遺児募金にご協力おねがいしまーす」が、自分という個人に向けられた発話ではないからこそその話だろう。

第4の状況は、感嘆の状況である。感嘆とは本来的に誰かに対するものではなく、ひとりごとであり、声の大小に関わりなく「叫ぶ」ものである。「いたいよー」「あー酒のみたい」などがこれにあたる。川上(1977:p.116)にも、「浜名湖って広いんだねー」が特別強い感動によってアクセントが無視されるとあり、郡(1997:p.196)もこれを認めている。

第5の状況は「はるすぎてー」などと詩歌を朗読する状況で、これは小島(1997:pp.83-84)で指摘されている。「聞き手に向けた話しかけ」という構図から外れ、「叫び」に近くなるのだろう。

第6の状況は、「キンキウジタイ。ヒナンセヨ」のように、コンピュータなどの発話を演出する場合である。この場合の【高い平坦】は、コンピュータなどが「聞き手に向かう」というコミュニケーションの基本ができておらず、人間と会話するよう見えても、実際は情報を読み上げているにすぎないということの卓抜な具現化ではないか。

第7の状況は実況中継で、これも小島(1997:pp.83-84)が指摘している。「朗読調あるいはそれに近い節回し」として、実況放送に近いものなどの高い平坦調が宮地(1963:pp.181-182)によっても指摘されている(もっとも、宮地はこれをイントネーションには含めていない)。

但し、実況中継なら常に【高い平坦】かというところではなく、「はいりました、巨人土壇場で逆転ホームラン!」「二十年ぶりの優勝です!」のような「山場」にかざられる。山場だから「叫ぶ」のだろう。

競技種目によって、山場の現れ方はさまざまである。自動車レースでは、タイヤ交換や燃料補給のためのピットインは順位を狂わせかねない大きな山場である。実例を一つ挙げておく。ここでは実況者(塩原恒夫)だけでなく、解説者たち(片山右京・近藤真彦)の発言も丸かっこでくって入れておく。例の中で、ブラケット([]印)で囲った部分は【高い平坦】で発音されている部分である。(わかりやすいように、上付き線を付けておく。)

さあそして、「モントーヤ。モントーヤです。」 さあラルフ・シューマッハに続いてウィリアムズBMW。「パンパブロ・モントーヤもピットイン。」 タイヤ交換と再給油を行います。(片山:この前の周のあのファーステスト・ラップが) えー (片山:どう響いているかですね) あーなるほどね。(片山:微妙な距離でしたから) はい。さあ 「8秒2という静止時間の後、スピード制限の設けられたこの」 せまい 「ピットロードをいきます。パンパブロ・モントーヤのマシーン。」 (近藤:出口もせまい!)

〈2003年5月31日フジテレビ『F1グランプリ in モナコ』, 実況:塩原恒夫)

これは、ウィリアムズBMWというチームに所属する、パンパブロ・モントーヤというドライバーの車がピットインし、8秒2でタイヤ交換と給油を行い、ふたたびピットロードを通過してレースに復帰していくという場面である。何といたっても圧巻なのは最後の部分で、「さあ」以降、ほとんどすべての語句のアクセントが【高い平坦】によって見事にかき消されている。その中で唯一、アクセントを保っているのが「せまい」という単語である。「せまい」の「せ」と「い」は前後の【高い平坦】と同じ高さで発音されているが、「ま」はさらに高く、前後の【高い平坦】から抜け出たような高さで発音されている。

この「せまい」の発音は一見、「アクセントとイントネーションが足し算的な関係に立ち、平和的に共存する」という、従来から認められているありきたりの現象に思えるかもしれない。だが、イントネーション【高い平坦】が一般的には単語のアクセントを消し去る性質を持っていることを考え合わせると、ここでの平和的な共存があくまで表面的なものであり、より深いと

ここでは両者の競合があることを認めざるを得ない。最も単純に言えば、単語「せまい」の前後ではイントネーション【高い平坦】が勝利をおさめ、単語のアクセントを消し去っているが、単語「せまい」のアクセントだけは逆に【高い平坦】にうち勝ち、このイントネーションを消し去っているということになる。あるいは、単語「せまい」のアクセントはイントネーション【高い平坦】によく抵抗し、足し算的な関係という、【高い平坦】が本来予定していない共存状態を勝ち取ったと言ってもよいかもしれない。いずれにせよ、単語「せまい」のアクセントが、イントネーション【高い平坦】のストレートな実現を阻害していることに変わりはない。

では、なぜ単語「せまい」のアクセントはイントネーション【高い平坦】のストレートな実現を阻害することができたのか？ この疑問を解くカギは文脈にある。この会話断片の少し前で、実況中継者（塩原恒夫）、解説者（片山右京・近藤真彦）の間で話題になっていたのは「ピットロードがいかにかまく危険であるか」ということであった。単語「せまい」のアクセントがイントネーション【高い平坦】のストレートな実現を阻害できたのは、話し手（塩原恒夫）の中で「せまい」というきもちが特にリアルで強かったためだと考えられる。このように、アクセントも、きもちがこもれば強くなり、イントネーションを破ることがある。「実況中継の山場ではアクセントは消える」と一律に考えてしまうことには無理があり、すべては具体的状況での、イントネーションとアクセントのせめぎ合いで決まる。話し手の中で、【高い平坦】を動機づけるきもち（「叫びたい」というきもち）が強ければ語のアクセントは消え、音調はイントネーション【高い平坦】どおりに高く平坦になる。逆に、語のアクセントを動機づけるきもち（たとえば「せまい」と言いたいきもち）が強ければイントネーション【高い平坦】のストレートな具現は阻害され、語（「せまい」）のアクセントが音調に反映される。

捕食者であるライオンと、餌食であるシマウマについて「ライオンとシマウマは競合関係に立つ」と言うことはおかしい。少なくとも、それはふつうの「競合」のイメージとはかけ離れている。同じことがイントネーションとアクセントについても言える。イントネーションとアクセントが競合関係に立つことを認めた研究においても、これまで想定されていたのは「イントネーションがアクセントの実現を阻害する」という図式だけであって、「アクセントがイントネーションの実現を阻害する」という逆の図式はまったく想定されていない。これでは「イントネーションとアクセントが競合関係に立つ」と言うには十分ではない。「イントネーションとアクセントが競合関係に立つ」と言うには、いまの例のように、「アクセントがイントネーションの（少なくとも本来の）実現を阻害する」ということも、どこかでおさえておく必要があるだろう。

5. 【じりじり上昇】

日常会話で、「叫ぶ」場面はそう多くない。したがって【高い平坦】は、日常会話ではさほど高頻度には現れない。この点を考えれば、「【高い平坦】は特殊なイントネーションだ」あるいは「【高い平坦】は特殊なもので、イントネーションではない」と断じられるということも、あり得ないわけではない。実際のところ、上述したとおり、【高い平坦】の第7の用法を取り上げた宮地（1963）は、これをイントネーションとはしていない。アクセントと競合するイントネーショ

ンの例として、【高い平坦】よりも、もっと標準的なものはないだろうか？

ここで、別のイントネーションとして、【じりじり上昇】を取り上げてみよう。アクセントと競合するイントネーションは、【高い平坦】だけではない。筆者が【じりじり上昇】と呼んでいるイントネーションも、やはり話し手のきもちの強さに応じてアクセントを消し去る。

たとえば食堂で、カレーにするべきか、それともオムライスの方がうまいのか、さんざん迷っていたAが、ついに「よし、カレー！」と一大決心のもと、カレーを店員に注文しようとした、とする。すでに同じテーブルでオムライスを注文して食べ始めていた友人Bが、Aの決心をぐらつかせてやろうとして、Aに向かって「いいの？ オムライスうまいよー」と言ってみせる、という事例を考えてみよう。この時Bは、後半の「オムライスうまいよー」の部分で、「オムライス」「うまい」というようなアクセントを完全に無視して発音できる。つまり、冒頭の「オ」が最も低く、そこから徐々に高く上昇し、末尾の「よー」で最高音に至るというように「オムライスうまいよー」を発音できる。筆者が【じりじり上昇】と呼ぶのは、このようなイントネーションである。

「オムライスうまいよー」が【じりじり上昇】で発せられ得るのは、話し手Bが、カレーに決めようとしているAをからかい、ちょっとしたプレッシャーを与えてやろうと思っていればこそである。つまりイントネーション【じりじり上昇】は、「自分Bは、何らかの悪い事態（いまの例なら〈あなたAがカレーのようなつまらないものを注文してしまい、本当にうまいオムライスを注文しそこなうこと〉）を意識している」ということを表す。相手に軽いプレッシャーを与えようとする際に、話し手はこのイントネーションを利用することがある。

たとえば、遊園地のお化け屋敷の前で、一人で入ると言い張る子供に親は、「こわいぞー」と【じりじり上昇】で言う（つまり「こ」を最も低く、だんだん上げて末尾の「ぞー」を最も高く発音する）ことができる。この時親は、〈おまえが大変こわい思いをすることになるんじゃないかと私は思う〉と、悪い事態を意識していることを告げ、子供にプレッシャーを与えている。兄のつまみ食いを発見した妹が、「あー」と【じりじり上昇】で言い、〈つまみ食いはいけないのに。怒られるぞー〉といったプレッシャーを兄に与えようとするこも、同じように理解できるだろう。「怒られるぞー」じたいも【じりじり上昇】で発音することができる。教室で、先生の出した問題に、めずらしく手を挙げた劣等生に向けて、クラスメートが「おー」と【じりじり上昇】で言い、〈おまえ本当に答えられるのか。間違ったら恥をかくんだぞ〉とプレッシャーを与えようとするこも同じである。

【じりじり上昇】が現れる場面は、相手にプレッシャーを与える場面にはとどまらない。【じりじり上昇】の意味は先ほど述べたとおり「自分は何らかの悪い事態を意識している」というものであって、相手にプレッシャーを与えるのはその一用法にすぎない。プレッシャーとは関係ない場合にも、単に悪い事態を意識していれば【じりじり上昇】が出てくることがある。

たとえば、教室でいきなり「来週テストをします」と言うとうどうなるか。学生はいつせいに、「えー」と【じりじり上昇】で、〈そんな……〉といった不満・抗議の声をあげる。念のために確認しておく、この「えー」は、〈われわれをそんなに苦しめてよるしいんですかい、おい先生

さんよ)などと教師に対してプレッシャーを与えようとする発言ではない。というのは、教師がその場にいない状況でも、同じ【じりじり上昇】の「えー」が発せられることがあるからである。たとえば、授業を欠席した学生Aが、昼休みに、授業に出ていた友達のBから「あの授業、来週テストだよ」と教えられた、という場合にも、Aの反応として【じりじり上昇】の「えー」がありえる。この時Aは、その場にいない教師にプレッシャーを与えようとしているわけではないだろうし、Bにプレッシャーを与えようとしているわけでもない。【じりじり上昇】の「えー」には、プレッシャーを与えようとする用法とは別に、単に「悪い事態の意識」(〈それって最悪じゃん〉)といったきもち)に支えられた用法もあるということである。

女子学生どうしの会話には、「私が昨日出会ったイヤな人間」のような話が時々出てくる。この話を相手から聞かされた女子学生は、「かんじわりー」などと、話題になっている人物への嫌悪のきもち(感じ悪い)を表し、相手への共感を示すことがある。この時の「かんじわりー」も【じりじり上昇】で発せられるが、プレッシャーとは関係がない。

同じことだが、親に「いいな。わかったな。返事をしろ、返事」などと言われて、子供が何かをいやいや承服させられる場合、「はーい」という返事が【じりじり上昇】で出てくることがある。(やだなー)というきもちだろう。

プレッシャーと関わらない【じりじり上昇】はまだある。たとえば、処分に困ったLPレコードを結局、ゴミとして捨ててしまおうと決意する、という状況で、「捨てちゃおー」と、【じりじり上昇】でひとりごとを言う場合がある。(もったいないけど、しかたないもんね)というきもちだろうか。

だが、話し手が「自分は悪い事態を意識している」と表す場合に、いつも必ず、【じりじり上昇】が出てくる、というわけではもちろんない。オムライス¹の事例に戻れば、〈あなたはこんなにうまいオムライスを逃してしまうんだね?〉というきもちを表し、カレーを注文しかけている相手にプレッシャーを与えようとするからといって、必ずしも【じりじり上昇】で発音しなくてもいい。「オムライスうまいよー」は、「オムライス」「うまい」の部分アクセントどおりに「オムライス」「うまい」と発音した後、末尾の「よー」だけを上昇させることでも、相手にプレッシャーを与えることは可能である。あるいは、「オムライス」の部分アクセントどおりに「オムライス」と発音した後、後の「うまいよー」だけを【じりじり上昇】で発音してもいいだろう。

「オムライスうまいよー」の発音がどうなるのか、末尾の「よー」だけが上昇して「オムライス」「うまい」のアクセントは尊重されるのか、それとも「オムライス」のアクセントだけが尊重されて、後半の「うまいよー」は【じりじり上昇】するのか、あるいは「オムライスうまいよー」全体が【じりじり上昇】するのかは、話し手のきもちの強さに大きく影響される。つまり、〈あなたはこんなにうまいオムライスを逃してしまうのか? それでいいのか?〉というきもちが強いほど、全体が【じりじり上昇】で発音されやすい。逆に、このきもちが弱いほど、「オムライス」「うまい」のアクセントが尊重され、末尾の「よー」だけが上昇で発音されやすい。後半の「うまいよー」が【じりじり上昇】で発音されるのは、両者の中間的な場合である。

先ほど筆者は、カーレースの実況中継の実例を挙げて、話し手の「ピットロードはせまい」というきもちが強ければ、単語「せまい」のアクセントがイントネーション【高い平坦】を食うこともあり得る、と述べた。今述べているのは、同じことがイントネーション【じりじり上昇】にも当てはまる、ということである。アクセントだけでなく、イントネーションも、話し手のきもちで強さが変わる。したがって、イントネーションが勝つかアクセントが勝つか、仮にイントネーションが勝ってアクセントの実現が阻害されるなら、どの単語からどの単語までの範囲にわたって消すのかという、両者の「勢力圏」も、話し手のきもちで強さである。イントネーションとアクセントが競合した結果どうなるのかは、状況を離れた一般的なレベルで決まっているわけではない。イントネーションとアクセントは、それぞれの状況での話し手のきもちに応じて、せめぎ合っている。

6. 【上昇】

こう考えれば、思い当たることはいろいろ出てくる。ここで、【上昇】という、きわめて一般的で、イントネーションを紹介しているどんな文献にも出てくるイントネーションを取り上げてみよう。

【上昇】とは、ただ高さが上昇するというだけのイントネーションで、上昇のペースがゆるやかな場合、【じりじり上昇】とよく似ることもある。実は両者は同じものではないかとさえ筆者は疑っている。だが、先ほど見たように、【じりじり上昇】には「自分は悪い事態を意識している」という意味が認められる（より厳密に言うと、そのような意味を認めることが記述上、有益そうである）。したがって、「自分は悪い事態を意識している」という意味とは無縁に思える上昇調イントネーションは、とりあえず【じりじり上昇】とは別のもの（【上昇】）としておきたい。

たとえば、「帰ろう」を考えてみよう。これは、先ほど述べたように【ラーソラ】で（つまり「かえろ」）と発音されることもあるが、もっと他の場合もある。ここで注目したいのは、オウム返しに問い返す場合と、誘いかけの場合である。これら二つの場合で、「帰ろう」の発音は違う。

相手が「帰ろう」と言ってきたのをそのままオウム返しに『「帰ろう」だって?』の意味で「帰ろう?」と問い返す場合、アクセントとイントネーションは並列し、アクセント（「かえろお」）どおりの発音の後で、末尾が上昇する（「かえろおお」）。

だが、「帰らない? 帰ろうよ」という誘いかけの意味で「帰ろう?」と発音される場合は、「帰ろう」のアクセントは消え、「帰ろう」全体が【上昇】で発音される。

これは、イントネーション【上昇】の勢力圏が、話し手のきもちの強さに応じて変わるということである。オウム返しに問い返す場合は、単に、聞こえたことを確認するにすぎないが、誘いかけの場合は、一緒に行動しないかこちらから話をもちかける、積極的な態度が表されている。相手に向かう話し手のきもちが当然、誘いかけの方が強い。

イントネーションとしてどういうものを含め、どういうものを含めないかは、研究者によってさまざまな違いがある（たとえば秋永 1966:p.49 には、金田一春彦説と有坂秀世説の違いに関

する有益な論がある)。だが、筆者の知るかぎり、これまでのどの研究でも、【上昇】はイントネーションに含まれている。

誰にとってもイントネーションと言える【上昇】が、話し手のきもちの強さに応じて、アクセントを消し去ったり、アクセントと共存したりするということは、これまでイントネーションとアクセントに競合的關係を認めていた例外的研究でも、考えられていない。「アクセントとイントネーションは競合的な關係に立ち得る」という考えを、我々はもっと正面から受け止めなければならぬのではないだろうか。

若い世代の発音、と言われているものの一つに、形容詞否定形の発音がある。たとえば、「これ、からくない？」の「からくない？」を、【上昇】で言うのがこれにあたる。これにも話し手のきもちの強さが関係している。

単に、からいか、からくないかをたずねている場合の発言として、「これ、からい？ それとも、からくない？」と若い世代に言わせてみると、【上昇】はたいてい現れない。「からくない」はアクセントを尊重した形で発音され（そのアクセントが「からくない」「からくない」「からくない」と一様でないようだが）、その後で「い」の末尾が上昇する。

「からくない？」が【上昇】で発音されやすいのは、話し手自身が「これはからい」と思っていて、相手の同意を求めて発言する場合である。これは、単にからいかからくないかをたずねる場合よりも、相手に向かう話し手のきもちが強く出ている。つまり、「相手に向かうきもちが強ければ、単語のアクセントを無視して【上昇】で発音する」というこれまでのしゃべり方をそっくり受け継いで、ただそれを、形容詞否定形を発音する場合にもそうするというのが、若い世代の新しいところと言える。

第2節の冒頭で、筆者は「雨？」「飴？」という例を使って、イントネーションとアクセントが共存し得ることを示した。そこで具体的に上げられたイントネーションとは、【上昇】であった。しかし前述したように、【上昇】は話し手のきもちの強さしだいで、語句のアクセントを消し去り得る。

たしかに、イントネーション【上昇】とアクセントが共存し得るということは、認めなければならないだろう。だが実はそれは、話し手が、相手に向かうイントネーション【上昇】のきもちも特に強くは持っておらず、かといって語句に強い思い入れもないという、実験室での朗読などにありがちな、心的な無風状態での両者の「拮抗」に基づいた、どちらかといえば表面的なものではないだろうか。この「拮抗」の中で、語句のアクセントもイントネーションも、発言とともに音調に反映され、結果として「飴？」の末尾が「飴。」の末尾より高くなるというのが、イントネーションとアクセントの足し算的な關係ではないだろうか。また、「雨？」と、「あめ（雨）」を疑問で発音する場合、「め」を単純にイントネーション【上昇】に沿って高くすると、「め」が「あ」より高くなってしまいかねないというように、イントネーションの影響で語句のアクセントが壊れてしまうことを避ける形で、イントネーションの音調反映がアクセントの音調反映の後にずれこむというのが、イントネーションとアクセントの並列的な關係ではないだろうか。

話し手のきもちが少し動けば、イントネーション【上昇】とアクセントの競合はたちまち露わ

になる。若い世代の新しい言い方もその一端を見せてくれるように、共存の根底には、両者の競合が潜在的に常にあるのではないだろうか²。

もっとも、筆者はイントネーションとアクセントの共存のすべてを疑うわけではない。一部のイントネーションはアクセントとの共存を本来的に予定しており、これらについては根底に競合状態を考える必要はない。具体的には、句の連続専用のイントネーションである。これはアクセントとはレベルが異なっており、競合状態は生じない。以下、このことを、筆者が【高い山、低い山】【低い山、高い山】と仮に呼んでいる2つのイントネーションを使って示す。

7. 【高い山、低い山】

【高い山、低い山】というイントネーションはこれまでも、少なくともアベによって注目されており、【高い山、低い山】という本稿での仮称も、Abe (1998 : p.372) の記述にちなんでいる。この記述を筆者のことで紹介すれば、たとえば「はい」という返事を表す語にはアクセントがあり、ふつう「は」が「い」より高い。言い換えれば、「は」が山の頂上で、「い」が山の裾野である。したがって、「はい、はい」と「はい」を2回続けて相手に返事する場合、前の「はい」も山を作り、後ろの「はい」も山を作るので、山が2つできることになるが、喜んで返事するのか、イヤイヤ返事するのかという気持ちによって、2つの山の高さが変わる。喜んで「はい、はい」と返事する場合は、前の「はい」の山は高く、後ろの「はい」の山は低く発音される。イヤイヤ「はい、はい」と返事する場合は、前の「はい」は低く、後ろの「はい」は高く発音されると Abe(1998:p.372) は述べている。この記述は基本的に間違っていないだろう。

この記述を意識して【高い山、低い山】と筆者が呼ぶのは、「もちろんだ、認めるのにやぶさかでない」と、積極的に認めようとしている」というきもちで「はい、はい」と返事する場合のように、それぞれの単語や文節（いまの例なら「はい」）をアクセントどおりに発音しながら、全体（「はい、はい」）としてはだんだん低くしていく、イメージでいうと図3のようなイントネーションのことである。

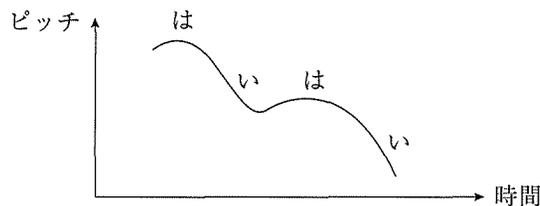


図3 【高い山、低い山】のイメージ（「はい、はい」を例にして）

他方、【低い山、高い山】と筆者が呼ぶのは、イヤイヤ「はい、はい」と返事する場合のように、それぞれの単語や文節（いまの例なら「はい」）をアクセントどおりに発音しながら、全体（「はい、はい」）としては高くしていく、図4のようなイントネーションのことである。

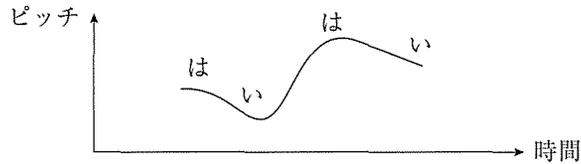


図4：【低い山，高い山】のイメージ（「はい，はい」を例にして）

いま述べたイントネーション【高い山，低い山】にしても，【低い山，高い山】にしても，複数個の句（いまの例なら2個の「はい」）を予定しており，個々の単語（「はい」）のアクセントはそのまま活かした上で，それらのアクセントどうしの高さ関係を指定する。つまり，一つ一つの単語のアクセントが現れるレベルよりも上の，より大きなレベルで現れるもので，一つ一つの単語のレベルとは競合しない。

「はい，はい」にかぎらず，【高い山，低い山】と【低い山，高い山】はさまざまなフレーズに現れ，話し手の気持ちを表す。たとえば，「ねーあなた行ってよ」と言われて，「行きます，行きます」を【高い山，低い山】で返事する話し手は，或る場所へ行くことを，「もちろん」と積極的に承知しているが，これを【低い山，高い山】で返事する話し手は，その場所へ行くことを約束・了解させられており（つまり或る運命を受け入れさせられており），イヤイヤ，しぶしぶというきもちを漏らしている。同様に，「ねー，私きれい？ ねーったら。きれい？」と聞いてくる女性に対して，「きれい，きれい」「はい，はい，はい」などと【高い山，低い山】で言えば，その女性の美しさを進んで積極的に認めようというきもちが表されるが，【低い山，高い山】で言えば，きれいだとイヤイヤ認めさせられているきもちが表される。

8. 【低い山，高い山】

このうち特に【低い山，高い山】について，Abe(1998)の記述に付け加えるとすれば，第1点は，【低い山，高い山】の有効範囲の広さだろう。上の「はい，はい」「行きます，行きます」「きれい，きれい」のような，同じ一つの句の反復でない場合は，【高い山，低い山】は「もちろんそうだと積極的に言っている」という話し手のきもちを表せないが，【低い山，高い山】はその場合でも話し手の悲観的なきもちを表せる。

たとえば，「うまくいきませんねえ」は，【高い山，低い山】で発音しても，もちろんそうだと積極的に認めるきもちを表せない。つまり，最初の「うまく」を全体に高く（その内部ではアクセントどおりに「う」を高く，「まく」を低く），次の「いきません」を全体にやや低く（その内部ではアクセントどおりに「い」を低く，「きませ」を高く，「ん」を低く），最後の「ねえ」を全体にうんと低く発音しても，そのようなきもちとは感じられない³。しかし，これを【低い山，高い山】で発音し，最初の「うまく」を全体に低く，次の「いきません」をやや高く，最後の「ねえ」をうんと高く発音すれば，物事がうまくいかずに落胆しているという悲観的なきもちの発言になる。

同様に，たとえば，「さむくなりましたねえ」は，【高い山，低い山】で発音しても，単に寒く

なつたと述べている発言にすぎないが、近所の人と出会った時の挨拶でよく聞かれるのは、【低い山，高い山】で「さむく」「なりました」「ねえ」をこの順にだんだんと高くしていくというものである。挨拶であるから基本的に笑顔で、明るい声で発音されるが、イントネーションじたいは「寒くなってしまってイヤですねえ」と暗い。もちろん、寒くなったことぐらいでたいいていの人はそれほど困らないが、「相手と一緒にボヤク小さな不幸」というのは挨拶ネタとして最高であるせいか、重宝されているようだ。

またたとえば、「すごいとこ乗たなあ」は、【高い山，低い山】で発音しても、喜んで言っているというきもちには特に表せないが、単語のアクセントを尊重しつつ、【低い山，高い山】で「すごいとこ」を低く、「乗た」を中ぐらいで、「なあ」を高く発音すれば、とんでもないところに左遷されてしまったものだといい落胆の発言になる。

同じことだが、「いまの技術はそうとういいとおもうよ」も、【高い山，低い山】で発音しても、話し手が喜んでいっているのかどうか、特に明らかではないが、【低い山，高い山】で「いまの」をうんと低く、「技術は」をやや高く、「そうとう」をさらに高く、「いいと」をもっと高く、「おもう」をうんと高く、「よ」を最も高くすれば、たとえば「あなたはいまの技術を全面否定して、ひとりで新たな道を切り開こうとしているが、あなたの試みはろくな結果にならない。やめておいた方がいいと思う」といった否定的な忠告のニュアンスになる。

但し、「やめておいた方がいいと思う」とは言っても、相手の無謀な試みをこの際何が何でも阻止してやろうというガッツにあふれたきもちはない。「あなたがいまの技術を全面否定して、ひとりで新たな道を切り開こうとしているということを私は受け入れるが、悲観的に受け入れる」と言っているだけで、あくまで力の抜けた、傍観者としてのコメントにとどめている。【低い山，高い山】の意味をより厳密に言えば、このような「運命を受け入れる話し手の悲観的なきもち」のようなものになるだろうか。「あなた行ってちょうだい」と言われて「行きます」と答えなければならない、「私、きれい？」と何度も聞かれて「きれい」と答えなければならない自分の運命を、変えようとはせず、そのまま受け入れつつ、やれやれとため息をつくきもちである。

この他、【低い山，高い山】は感心を表すこともある。たとえば、「しかし、たけうちさんって、えらいよねー」を、「しかし」をうんと低く、「たけうちさんって」を少し高く、「えらいよ」をかなり高く、「ねー」をうんと高く発音すれば、竹内さんに感心している発言になる。この「感心」というきもちも、いままで述べてきた「ガッツにあふれていない、力が抜けている」「運命を受け入れる悲観的なきもち」と無縁ではなく、むしろそこから出ているように思われるが、くわしいことは今後もっと調べてみなければわからない。

もう一つ付け加えておけば、悲観的なきもちにしろ、感心にしろ、【低い山，高い山】が現れさえすればいつも現れるというわけではない。これらのきもちも、実は文法的環境と関わっている。松本(2002:pp.126-127)が指摘するように、【低い山，高い山】で悲観的なきもちや感心が表されるのは、修飾節の外部の話であり、修飾節内部では単なる強調の意味になる。たとえば、「ながい、ながい、ながい」は【低い山，高い山】で発音すれば、たとえば或る橋が別の橋より

も長いかどうかで友人と賭をして負けた話し手が、「どうだ、長いだろう」と勝ち誇る友人に対してしぶしぶ負けを認める場合のように、悲観的なきもちが出る。しかし、「ながい、ながい、ながい橋（がありました）」のように、「ながい、ながい、ながい」を、名詞「橋」を修飾する連体修飾節に入れてしまえば、そのようなきもちはまったく表されず、「とてもながい橋」に近い強調の意味になる。これは連体修飾節だけでなく、連用修飾節も同様である。たとえば、「細く、細く、細く！」と【低い山、高い山】で言えば、「細く切れっていつも言ってるだろうが。なんでわからないんだ。あーやんなっちゃうなー」というような続きが想像される。これは、【低い山、高い山】で悲観的なきもちが表されていると考えてよいのではないかと思う。だが、「細く、細く、細く切ります」のように「細く、細く、細く」を「切ります」を修飾する連用修飾節に入れてしまえば、特に悲観的でもなく、「とても細く切ります」に近い、強調の意味になる。

9. 【核残し】

イントネーションとアクセントの関係として、並列的・足し算的・競合的な関係を、具体的な発話状況から論じてきた。それらの関係の根底に、イントネーションとアクセントの競合がある（つまりこれまで無視ないし軽視されてきた競合的な関係が最も本質的な関係である）と考えられる場合があることも、あわせて論じてきた。だが、イントネーションとアクセントの関係はこれですべてというわけではない。現段階では並列的・足し算的・競合的な関係のいずれに所属させることもためられる場合があることを、最後に紹介しておきたい。

たとえば、「帰りますか」と言う場合に、「かえりますか」とアクセントどおりに発音するのではなく、「かえりますか」と、「ま」の部分だけを高く残して、他をすべて低く発音することがある。これは、「仕方ないですね。ここはいったん出直しましょうか」といった、妥協を持ちかけるきもちを表す言い方である。

また、「帰りますよ」と言う場合に、アクセントどおりに「かえりますよ」と発音するのではなく、「ま」の部分だけを高いまま残して、「かえりますよ」と、他をすべて低く発音すれば、「帰るに決まっているでしょう」という、当然のことを言わされることに軽くいらだつきもちが表される。

さらに、「おとこかー」と言う場合に、アクセントどおりの「おとこかー」ではなく、「こ」の部分だけを高いまま残して、「おとこかー」のように、他をすべて低く発音すれば、女だと期待していたのに、なんだという、落胆のきもちが表される。

「かえりますか」「かえりますよ」のアクセントでは、高い部分は「えりま」であり、「ま」はその部分の最後、つまりアクセント核に位置している。「おとこかー」のアクセントでは、高い部分は「とこ」であり、「こ」はやはりアクセント核に位置している。結局のところ、いま問題にしている発音とは、アクセント核の位置にある音（「ま」「こ」）は高いまま残し、他の部分はすべて低く発音するという発音である。この発音を、筆者は仮に【核残し】と呼んでいる⁴。

【核残し】は落胆やいらだちといった暗いきもちを表すが、その意味はいま見たように、文型と対応する形でさらに具体化できる。「帰りますか」の例のように、【核残し】は、問いかけの

「か」で終わる発言では、妥協の持ちかけを表す。「帰りますよ」のように、情報を告げる「よ」で終わる発言では、当然さからくるいらだちを表す。そして「男かー」の例のように、感嘆の「かー」で終わる発言では、落胆を表す。

では、このように単語のアクセントを、核の部分だけは高いまま保存するが、他の部分はすべて低くするイントネーション【核残し】とは、アクセントとどのような関係にあると言えばよいのだろうか？ 少なくともこれまで取り上げてきたイントネーションは、【ラーソラ】【高い平坦】【じりじり上昇】【上昇】いずれにしろ、それ自身で形を持っていた。たとえば、イントネーション【ラーソラ】は「ラーソラ」という形（メロディ）を持っていた。これは、【高い平坦】にしても、【じりじり上昇】にしても、【上昇】にしても変わらない。それに対して【核残し】は、そのような自身の形を持たず、単語のアクセントとおりの発音を、アクセント核の部分は保持し、それ以外の部分はゆがめるといって、アクセントに寄生する方法でのみ現れる。

このようなアクセントに対する【核残し】の寄生的性質を、イントネーションとアクセントの競合の結果と考えることができずには言い切れない。つまり、【核残し】とは【低い平坦】とも言えるようなイントネーションと語句アクセントが競合した結果の現象であり、アクセント核だけが【低い平坦】を破って生き残ったのだという考えは、可能かもしれない。【低い平坦】といえ、思い当たるのはたとえば「ちよつとも一さだのぶさーんホントにも一こまりますよー」の「ちよつとも一さだのぶさーんホントにも一」のようなものであり、この意味は上述した、「落胆やいらだちといった暗いきもち」という【核残し】の意味に近い。

だが、この考えには問題がないわけではない。いま述べた【低い平坦】はしばしば、語句のアクセント（「ちよつと」「もう」「さだのぶさん」「ホントに」）をアクセント核ごと消し去り、ストレートに実現される。言い換えれば、【核残し】の場合はこのストレートな実現がアクセントによって阻害されている。この阻害が【核残し】の意味から説明できるかどうか、たとえば「かえりますよ」を【核残し】ではなく【低い平坦】で「かえりますよ」と発音すれば、それだけいらだちの気持ちが増すと見えるどうかは疑問である。【核残し】は【低い平坦】に関連しているとしても、同じものとしないう方がよいかもしれない⁵。

なお、念のためにいえば、ここで示したようなアクセントに対する【核残し】の寄生的な性質は、「アクセント」の定義を変えても基本的に変わらない。たしかに、アクセントを「語中でのアクセント核の有無および位置」と定義して、語頭の「低」から「高」への上昇はアクセントではなくイントネーション（句音調）だと考えれば、「かえりますか」などの【核残し】は、イントネーション【低い平坦】がまず実現し（「かえり」）、その後でアクセントが実現する（「ますか」）という、ありふれた並列的な関係として理解できそうにも思える。だが、その場合のイントネーション【低い平坦】は、語頭（「か」）から、アクセントがある位置（「ま」）の手前まで（「かえり」）を勢力圏とするものである。つまり、イントネーション【低い平坦】とアクセントに並列的な関係を認めるにしても、イントネーション【低い平坦】がアクセントに敏感なものとして設定されていることに変わりはない。

とりあえず、このようなイントネーションとアクセントの関係を「寄生的な関係」と呼んで、

並列的な関係・足し算的な関係・競合的な関係とは別の第4の関係としておきたい。この措置が妥当なものかどうかは、さらにくわしい検討を重ねてみなければわからないが、それは本稿の射程を超える。本稿で述べようとしたことは、「ことばの具体的な発話状況に目を向ければ、日本語のイントネーションとアクセントは、話し手のきもちに応じて、これまで認識されていた以上に多様な関係に立ち得ることがわかる」ということ、そして「イントネーションの環境や意味は文法とつながっている。文法とはそういうものではないか」ということに尽きる。

注

- 1 但し、話者によっては【高い平坦】は句頭には実現しにくい。つまり「はいダイコンやすいよー」よりも「はいダイコンやすいよー」を自然と判断する話者や、「交通遺児募金にご協力おねがいしまーす」よりも「こう通遺児募金にご協力おねがいしまーす」を自然と判断する話者がいる。これらの話者にとっても、【高い平坦】が「ダイコン」「やすい」「こう通遺児募金」などのアクセント（少なくとも「高」から「低」への下がり）をかき消しているということに変わりはない。これらの話者の判断は、【高い平坦】がいつも絶対的に優位というわけではないということを示している。つまり、句頭という「局地戦」では、イントネーション【高い平坦】は、別のもの（それをアクセントの開始部分と呼ぶか、句音調と呼ぶかは別として）に敗れることも話者によってはある。
- 2 アクセントと競合的な関係に立つイントネーションには、他にも後述する【低い平坦】や、松本(2004)の「尻上がり」がある。
- 3 「ねえ」や「なあ」などがアクセントを持つかどうかは微妙な問題だが、本書では記述を簡単にするために、これを認めておく。
- 4 「こども」のようにアクセント核を持たない語句の場合、「こどもかー」のように、次の語句（「かー」）の最初の拍（「か」）が高くなり、他の部分はすべて低く発音されるようである。この意味で【核残し】という呼称は、実態（アクセント核がなくても高い部分が1拍できる）を正確に反映したものではないということをお断りしておく。
但し、このような「アクセント核を持たない語句の場合は次の語句の最初の拍が高くなる」という現象は、【核残し】の特殊事情というわけではなく、プロミネンスにも共通して見られる。たとえば、アクセント核を持たない語句「微妙（びみよー）」を考えてみると、「微妙に（びみよーに）」にプロミネンスが付されると、「びみよーに」になることがある。
- 5 アクセントに対して寄生的な関係に立つイントネーションは、すでに一部指摘されていると言える。たとえば川上(1956)は、「とんでもない」が「とんでもない」と発音されるだけでなく（この発音を①とする）、②「とんでもない」、③「とんでもない」、④「とんでもない」、あるいは⑤「とんでもない」、さらには⑥「とんでもない」のように発音され得るなどと指摘し、これらを文音調の型とする見方を提案している。本稿はこの提案に賛同し、イントネーションとアクセントの相互作用という観点をさらに前面に打ち出そうとするものである。但し、本稿の【核残し】は川上(1956)の「遅上がり型」（②③④、特に④）と似るものの、両者は完全に同じものではない。まず、「京都へ」の発音「きよーとへ」は遅上がり型だが（同 p.26）、【核残し】ではない。次に、本稿注4に述べたように、【核残し】は平板型の語の場合にも現れるが、遅上がり型はこの点不明である。また、遅上がり型は低の部分（たとえば④なら「とんでも」の部分）が緩く上昇すると記述されているが、【核残し】のこの部分は上昇とは限らない。

参考文献

- 秋永一枝(1966)「日本語の発音－イントネーションなど－」『講座日本語教育』2, 48-60, 早稲田大学語学研究所
- 天沼寧・大坪一夫・水谷修(1978)『日本語音声学』くろしお出版
- 川上泰(1956)「文頭のイントネーション」『国語学』25, 21-30
- 川上泰(1963)「文末などの上昇調について」『国語研究』16, 25-46, 國學院大學国語研究会
- 川上泰(1977)『日本語音声概説』おうふう
- 郡史郎(1989)「強調とイントネーション」杉藤美代子(編)『日本語の音韻・音声(上)』316-342, 明治書院
- 郡史郎(1997)「日本語のイントネーション：型と機能」杉藤美代子(監修)国広哲弥・廣瀬肇・河野守夫(編)『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』169-202, 三省堂
- 小島美子(1997)「日本のことばとメロディ」『國文學：解釈と教材の研究』42-7, 82-85, 學燈社
- 定延利之(1998)「言語表現に現れるスキミングの研究」京都大学大学院文学研究科博士論文
- 定延利之(2000)『認知言語論』大修館書店
- 定延利之(2002)「「うん」と「そう」に意味はあるか」定延利之(編)『「うん」と「そう」の言語学』75-112, ひつじ書房
- 定延利之(2004)「日本語の音声コミュニケーション教育の必要性と障害」『日本語教育』123, 1-16
- 定延利之(2005)「チャレンジコーナー」『言語』34-4, 104-109, 大修館書店
- 松崎寛・河野俊之(1998)『よくわかる音声』アルク
- 松本恵美子(2002)「連体修飾節のプロソディ」『東亜日語教育国際研究会論文集(上)』124-131, 天津外国語学院
- 松本恵美子(2004)「オノマトペに使われる尻上がり調イントネーション－準備的考察－」『大阪樟蔭女子大学 日本語研究センター報告』12, 41-53.
- 宮地裕(1963)「イントネーション」『国立国語研究所報告23 話しことばの文型(2)－独話資料による研究－』178-208, 秀英出版
- 森山卓郎(1989)「文の意味とイントネーション」宮地裕(編)『講座日本語と日本語教育1 日本語学要説』172-196, 明治書院
- Abe, Isamu(1998)Intonation in Japanese. Hirst, Daniel, and Albert Di Cristo(eds.) *Intonation Systems*. 360-375. 出版地: Cambridge, U. K.; New York, N. Y.
- Hopper, Paul J.(1995) The category 'event' in natural discourse and logic. Abraham, Werner, Talmy Givón, and Sandra A. Thompson(eds.) *Discourse Grammar and Typology: Papers in Honor of John W. M. Verhaar*. 139-150. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

謝 辞

研究の機会を与えて頂いた、杉藤美代子先生、ニック・キャンベル先生、中川正之先生のお名前を記して謝意を表したい。また、適切なコメントを下された査読者の方々にもお礼申し上げたい。本稿は、日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究(A)「日本語・英語・中国語の対照にもとづく、日本語の音声言語の教育に役立つ基礎資料の作成」(課題番号:16202006, 研究代表者:定延利之), 科学技術振興機構(JST)による戦略的創造研究推進事業(CREST)「表現豊かな発話音声のコンピュータ処理システム」(研究代表者:ニック・キャンベル), 総務省の戦略的情報通信研究開発推進制度(SCOPE, 課題番号:041307003, 研究代表者:ニック・キャンベル)の援助

を得ている。

(投稿受理日：2005年3月23日)

定延 利之 (さだのぶ としゆき)

神戸大学国際文化学部

657-8501 神戸市灘区鶴甲1-2-1

sadanobu@kobe-u.ac.jp

Diverse relationships between intonation and accent in Japanese prosody

SADANOBU Toshiyuki
(Kobe University)

Keywords

intonation, accent, copulative relation, cumulative relation, conflictive relation

Abstract

It is widely accepted that intonation and accent are either on copulative or cumulative relation in Modern Standard Japanese prosody. On copulative relation, intonation and accent are juxtaposed, as is clearly shown in a question sentence *Ame?* (Rain?), where the High-Low accent of the word *ame* (rain) is first realized and then follows the rising intonation. On cumulative relation, intonation and accent are overlaid with each other, as is ascertained by comparing *Ame?* (Candy?) with *Ame.* (Candy.): The final part *e* of the word *ame* (candy) with Low-High accent is higher in the former question sentence than it is in the latter declarative sentence. This paper shows that the relationship between intonation and accent can be more diverse than it has been thought to be so far, by focusing on natural speech in an everyday conversational environment. More concretely, this paper shows: (i) Intonation and accent can have a conflictive relationship, where they fight each other. The more the speaker is devoted in an attitude connected with an intonation, the more that intonation is likely to expel lexical accents. Conversely, the more the speaker wants to put prominence on a word, the more its accent is likely to resist (and even intercept) intonation; (ii) Some "peaceful" relationships between intonation and accent are actually based on their conflict on a deeper level; (iii) Besides copulative, cumulative, and conflictive relations, intonation can have a parasitic relation to accent. Parasitic intonations are realized only by distorting the normal accent of words.